

# バセドウ病に対する放射性ヨウ素内用療法の検討

公益財団法人 星総合病院 放射線科 ○玉根 勇樹 (Tamane Yuki)  
続橋 順市 星 宏治  
公益財団法人 星総合病院 外科 片方 直人

## 【目的】

放射性ヨウ素内用療法は、放射性ヨウ素の入ったカプセルを服用し、甲状腺の疾患を治療する方法である。近年、ガイドラインの改正により外来で当治療が可能となった。当院は、平成25年3月より当治療法を開始し、平成26年9月現在、10症例(男性1症例、女性9症例)延べ14件に対し治療を実施した。

当治療法の実施に当たり、運用・管理体制の構築を目的とする。また、当治療法開始からの治療成績の検討を行う。

## 【治療の流れ】

①治療適応の決定、②放射性ヨウ素投与前検査(甲状腺エコー、単純CT、甲状腺シンチグラフィ)、③放射線科医による診察・説明、投与量決定、④放射性ヨウ素の投与、⑤フォローアップとなる。④放射性ヨウ素の投与の前後には、ヨウ素制限を実施している。また、当治療法が可能ない日として毎週月曜日午後15時に検査枠を設けている。

## 【投与当日の流れ】

①放射線科医の診察・注意事項の再度説明、②会計、③RI室にてカプセルを服用、④気分不快等無いか30分程度RI室内で待機、⑤退室・帰宅となる。⑤退室にあたっては、退室基準のいずれか一つを満たしているのを確認し退室させる必要がある。ガイドラインにより、外来でのバセドウ病に対する当治療法は投与量が500MBqを超えないという制限がある。この制限により、退室基準の一つを満たしているため、投与後すぐに退室が可能である。また、当院では、退室時に測定線量率を測定するようにしている。

## 【治療成績】

治療成績は把握している9症例について検討した(初回投与後観察期間中央値8ヶ月(2~10ヶ月)時点)。内訳は、甲状腺機能正常化(寛解)2症例、甲状腺機能亢進6症例、甲状腺機能低下1症例である。9症例のうち、3症例についてはすでに再投与を実施している。また、甲状腺機能亢進6症例のうち、2症例は投与量の計算上、複数回投与が必要な症例である。一回の投与では期待通りの治療効果が得られない症例が多々見られた。甲状腺の放射線感受性には個体差があるため、計算上の投与量では不十分な場合があると考えられる。当院外科医が再投与を考慮するのは、一回目の投与から約半年過ぎても抗甲状腺薬が切れないうちである。

## 【結語】

当治療法の実施にあたり、運用・管理体制を構築した。治療実績は10症例延べ14件である。治療成績を把握している投与9症例のうち甲状腺機能正常化(寛解)は2症例という治療成績であった。これまでの治療成績を踏まえ、至適投与量の決定が課題であると考えられる。今後も定期的に当院での治療成績を検討し、安定した治療効果の得られる治療法として確立していきたい。